**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第５回　（２０１４年８月２６日）**

**・第５回の勉強範囲：「第二版の出版のことばと序文」(10)頁**

・📖（読むp(10)）**霊性の師としてのシュリー・ラーマクリシュナの特徴**

**それはさまざまな信仰の道を実践したことで得られた『至高実在』の悟りであり、ヴェーダやヴェーダーンタなどの聖典が証言している霊的経験さえぐものであった。**

（解説）

「私の霊的な経験にはヴェーダやヴェーダーンタにのっていないものがある」と、シュリー・ラーマクリシュナご自身が語っておられました。

ひとつは「**ヴィッギャーナ**」です。

ヴェーダとヴェーダーンタには、サマーディ（悟り）までの経験は述べられています。

たとえばニルヴィカルパ・サマーディ（「瞑想」と「瞑想者」と「瞑想の対象」がひとつになる状態👉第３回勉強会）は、ブラフマンとひとつの状態であり、それがウパニシャッドの最高の経験、最高の知識「ギャーナ」でした。

しかしシュリー・ラーマクリシュナは、サマーディに入っただけではなく、その状態に入って、そのあと戻ってきています。その戻ってきた状態が「**ヴィッギャーナ**」であり、『福音』の中に何回も描写が出てきます。

もうひとつは、**「二元論的」、「限定された非二元論的」、「非二元論的」（👉第４回勉強会）の三つの哲学的アイデアの調和**です。

ヴェーダーンタ、ウパニシャッドは、これら三つの異なる哲学の潮流について語ってはいますが、「それらの調和が可能である」ということは言及していなかった。シュリー・ラーマクリシュナは三つの哲学を経験しただけではなく、それらが調和しうることも経験したのです。

・📖（ふたたび読むp(10)）「**それはさまざまな信仰の道を実践したことで得られた『至高実在』の悟りであり、ヴェーダやヴェーダーンタなどの聖典が証言している霊的経験さえぐものであった」**

（解説）

時代もあります。ヴェーダ、ヴェーダーンタの時代にはないものが、シュリー・ラーマクリシュナの時代にはあった。ヴェーダの時代には、キリスト教もイスラム教も仏教もなかったでしょう？　しかしラーマクリシュナの時代には、すでにさまざまな宗教があった。だから、それらをどのように調和するか、という経験が書かれたのです。

もちろんウパニシャッドにも「真理はひとつ。悟りの方法はさまざまある」というヒントはあります。

しかし**「信仰の数だけ道はある」というアイデアの、具体的な方法は何か**については、そこにはなかった。ヴェーダの時代にイスラム教も仏教もありませんでしたから。『バガヴァッド・ギーター』に調和のアイデアはあるけれども、その頃、イスラム教も仏教もなかったでしょう？

ラーマクリシュナの特徴は、さまざまな宗教の悟りの道についての経験と、それらの調和の経験があったことです。

自分で実践し、その経験から、どの宗教の神様も一緒である、どの宗教の実践の道をとおっても霊的な経験は一緒である、という結論を得たことです。

・📖（つづきを読む）**ご自身が歩まれた道であったから、どの信仰の道に関しても微細に渡ってご存じだった。**

（解説）

そうです。**「ご自身が歩まれた道」**。これがもうひとつの特徴。

たとえば、トター・プリー（＊シュリー・ラーマクリシュナにヴェーダーンタ哲学を伝授し、出家のイニシエイションを授けたサンニャーシー）の経験は、ギャーニだけ。バイラヴィー・ブラーフマニー（＊シュリー・ラーマクリシュナにタントラの修行を伝授したブラーミンの女性）の経験は、タントラだけ。

トター・プリーは求道者のためにギャーニの道を案内することはできるが、バクティの道は案内できない。なぜなら自分の経験はギャーニだけだったから。

バイラヴィー・ブラーフマニーの経験はタントラだけだったから、ヴェーダーンタのご案内はできない。

このように悟った人のほとんどは、ひとつの道で、たくさんの修行をかさね、その道だけをとおって、やっと悟りにたどりつく。しかしラーマクリシュナは、いろいろな道を実践し、それぞれの道で悟りにいたった。それがとても特別です。

ラーマクリシュナがトター・プリーからギャーニを勉強したかったとき、バイラヴィーは反対しました。ギャーニの勉強はしないほうがよい、なぜなら、神様にたいする愛がなくなりますからと。（笑い）「トター・プリーという方は、知識だけが好き、神様は好きではないです」と。（笑い）お釈迦さまも同じです。お釈迦さまは説法のとき、神様については言及しませんでした。神様にたいする愛について、なにも言いませんでした。しかし、求道者の中には、神様にたいする愛を表現するのが好きな人もたくさんいますね？　その人にはお釈迦さまの方法は難しいです、お釈迦さまは知識の道だけですから。

これがラーマクリシュナの特徴です。

ギャーナ、バクティ、ヨーガ、瞑想──それをひとりですべて実践し、それぞれの道をすべて悟りました。

それだけではなく、いろいろな宗教──キリスト教、イスラム教、──みな実践して悟りました。

**ですからすべての種類の求道者をご案内することができた**のです。悟った人のほとんどは、ひとつの道だけでいっぱい実践して、ひとつの道だけで悟ることができる。シュリー・ラーマクリシュナはいろいろ道で悟った。それがとってもとても特別です。

おもしろい逸話があります。

シュリー・ラーマクリシュナの死後、ラマナ・マハリシ（＊ギャーナ・ヨーガを実践した、インドのとても有名な聖者）のアシュラムで、マハリシの信者とシュリー・ラーマクリシュナの信者の間で議論のようなことがありました。

そのラーマクリシュナの信者は、ラマナ・マハリシをとても尊敬していましたが、一番偉大な方はシュリー・ラーマクリシュナだという考え。一方、ラマナ・マハリシの弟子の考えは、もちろんラマナ・マハリシが一番偉大だという考えです。

その議論を聞いたラマナ・マハリシのコメントがおもしろかった。「見てごらん。私はひとつの道（ギャーナ）だけで悟りました。しかしラーマクリシュナはいろいろな道の方法で悟りました」。

・📖（つづきを読む）**だからあらゆるタイプの求道者が直面する問題をやすやすと見きわめ、効果的に解決された。そのうえ、異なるさまざまな道の実践者たちが、各自の理想神の完全なわれをシュリー・ラーマクリシュナの中に拝したのだった。**

（解説）

自分の甥の赤ちゃんのことが大好きで、神様のことを考えようとしても、どうしてもその子のイメージが現われてしまう女性の話をしましたね？　そのことを相談されたシュリー・ラーマクリシュナの答えは、「その赤ちゃんをベビー・クリシュナだと思ってお世話してください」というものでした。彼女には決して「放棄してください」とは言わなかった、「神様のイメージを執着の対象に重ね合わせてください。自分の甥と思わないで、ベビー・クリシュナに食事をさせています、お世話をしていますと考えてください──そうするとやがて執着がなくなります。そのうえ霊的にも進歩します」と助言しました。これは、神様にたいする愛の道をおしえた例。

もうひとつの例は、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの例。

スワーミー･ヴィヴェーカーナンダはあるとき、瞑想をしていて、シュリー・ラーマクリシュナが馬車に乗ってスワーミージーのもとにいらっしゃるヴィジョンを見ました。そしてそれは本当に現実のものとなり、ラーマクリシュナが馬車に乗って、実際にやって来たので、このことを申し上げました。スワーミージーは超能力を得ていたのです。

ですが超能力は、悟りの一番大きな障害でもある。

シュリー・ラーマクリシュナはスワーミージーに助言しました、「その力には気をつけなさい。瞑想をとりあえずやめて、超能力のちからがなくなったら、また、瞑想を再開してください」。

なぜそのような助言ができたのでしょうか？

なぜならラーマクリシュナ自身にその経験（すなわち、瞑想の道＝ラージャ・ヨーガの経験）があったからです。

パタンジャリも言っていますね、瞑想を続けるとさまざまな超能力があらわれると。しかし絶対気をつけたほうがいい。ふつうの聖者は超能力が授かるととてもうれしい。（笑い）力の証明になり、信者がたくさん来ますから。しかし本当は、悟りの大きな障害です。喜ぶ聖者は本当の聖者ではない。普通のスピリチュアル・グルに過ぎない。しかし、ラーマクリシュナの助言は、「瞑想をやめてください」でした。瞑想を続ければ超能力をさらに得ます。すると悟りはできないからです。そしてそれが本当のグルです。

瞑想にまつわるもうひとつの例。

スボダーナンダジ（直弟子のひとり）は、シュリー・ラーマクリシュナからあるマントラを教わり、「寝る前にそのマントラを唱えてください」と命ぜられました。スボダーナンダジは言われたとおり寝る前に蚊帳の中に座って、マントラを唱えはじめると、突然、こわーい、（笑い）ヘビが蚊帳の外に現れて、シューシュー言っているではありませんか！　スボダーナンダジはとっても怖かった。

後日ドッキネッショルに行って、「そのマントラを唱えると、ヘビがあらわれます」と報告すると、シュリー・ラーマクリシュナはあわてることなく、「そのマントラは正しいです。怖がらずに瞑想を続けてください」と言いました。

すなわちラーマクリシュナは、そのマントラの経験をすでにしていたから「やめなさい」とは言わず、「マントラは正しい」と導くことができたのです。ふつうのグルなら「そのマントラは危ない。やめてください」と言うでしょう。

このようにタクールは瞑想を、あるとき「やめて」、あるとき「つづけて」。ケースバイケース。このようにご案内できていました。

（『福音』勉強会第５回、以上）

**＊付記＜ヴェーダとヴェーダーンタについて＞**

**──今回の勉強会の冒頭で、詳しい説明がありましたので、以下にそれをまとめました。**

ヴェーダはサンスクリット語で書かれたインドの古い聖典で、「ヴェーダ」は「**知識**」という意味です。

「ヴェーダ」の特徴（１）→　宗教の聖典は、その宗教をつくった一人の人──新約聖書ならイエス、コーランはモハンマド、仏教聖典はお釈迦さまというように──の言葉や思想が反映されています。イエスがいなければキリスト教とはいえないし、お釈迦さまがいなければ仏教とはいえない。しかしヴェーダは、ある聖者やある方の言葉でつくられてはいません。これは大きな特徴です。では、ヴェーダはどのように著されたのでしょうか？

「ヴェーダ」の特徴（２）→それは聖者たちのきれいな心にあらわれた、神聖な言葉、神聖なものなのです。決して「作った」ではない、「**あらわれました**」。すなわちヴェーダは、プルシャ（ひと）によってつくられたものではない。ですから、否定形の「ア」をつけて、「**アパウルシャ（A-pauruseya）**」と言われています。

「ヴェーダ」の特徴（３）→　ヴェーダの起源について。神さまが、宇宙を創造するときにあらわれ出るのは、宇宙と、そして神様の神聖な知識（真理）です。それらは、創造のとき共にブラフマンからあらわれ、宇宙がブラフマンに戻るとき、知識もふたたびブラフマンに戻ります。ほかの宗教は教祖が生まれたあとから始まりました。しかしヴェーダはそうではない。ヴェーダは宇宙が創造されたときからある、誰によってもつくられていないもの。ブラフマンからあらわれたもの。むかしからあったものが、賢くてきれいな聖者の心にあらわれた。これがヴェーダです。

　「ヴェーダ」の特徴（４）→　「ヴェーダ」は「**シュルティ**」とも言います。「シュルティ」の語源は「**耳**」です。昔は「書く」文明が未発達だったので、生徒は先生から耳できいて覚えて勉強していました。その生徒がやがて先生になって、新たな生徒はその先生から聞き伝えて伝承していきました。これが「シュルティ」のゆえんです。

　「ヴェーダ」の種類　→　古いものから順に、**リグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダ**と４つあります。

分類のしかた（１）→　これらのおのおのが、内容によって４つに分けられています。**「サムヒター」「ブラーマナ」「アランニャー」「ウパニシャッド」**です。たとえばマントラや賛歌に関するものや、儀式（ヤッギャン＝護摩供養）の詳しいやり方や儀式の結果に関するもの、また、身体の治療や占星術、建物を建てる方法まで多岐にわたる知識、哲学などです。

分類のしかた（２）→　別の分類のしかたによると、ヴェーダは二つの部分から成立しています。**「カルマ・カーンダ」**と**「ギャーナ・カーンダ」**です。

「カルマ・カーンダ」の「カルマ」とは「儀式」で、すなわち儀式の部分と言う意味です。儀式の詳細（儀式すなわち護摩供養の時に唱えるマントラ、賛歌などの詳細や儀式のやり方、結果など）はそこにあります。（＊「カルマ」の意味はふたつある。「儀式」と「働き」。たとえば「カルマ・ヨーガ」は「働きのヨーガ」という意味である。『福音』の中でラーマクリシュナは「カルマ」についてよく述べているが、前後関係でどちらかの意味合いになります）

一方、「ギャーナ・カーンダ」は知識の部分と言う意味で、**ギャーナ・カーンダのベースはウパニシャッド**です。

そしてすべてのヴェーダに、ギャーナ・カーンダ（ウパニシャッド）の部分がありますが、それはあとからヴェーダに加えられたものでした。それはなぜ？

最初はカルマ・カーンダだけでした。昔のひとびとは、普通の方法ではできない、お金を使ってもできない、自分の力ではできない、そういった欲望の成就を、神秘的な方法で祈とう（すなわち儀式）したのです。

神様には風の神、海の神、学問の神、富の神など、様々な方がいて、みなそれぞれの力がありますね。その神様を喜ばせると、その神様のおかげで特別な恩恵がいただけると期待したわけです。

当初のヴェーダは、欲望を満足させるために必要な儀式の詳細──富の神様を喜ばせるためにはどのように儀式をするか？　供養のための火はどのようにおこすか？　どんなものを捧げるか？　どのマントラを唱えるのか？──だったのです。王様のまわりにいるゴマすりたちのように、（笑い）『福音』に出てくるジャドゥ・モリックの周りのひとびとのように、神様にもたくさんの賛歌、捧げもの、儀式での食事（＊精妙な形の神様の食事も精妙なものが供えられた。儀式での煙がそうである）を捧げてお供えすると、神様はよろこんで、信者の願いをかなえる──ヴェーダの時代は、当初、それがとても重要でした。

そしてその目的は、敵を殺したい、お金がほしい、学者になりたい、子供が欲しいなど、昔も今と同じ世俗的な願いでした。ラーマーヤナ叙事詩にも、儀式をおこなって神様のおかげで子供が生まれた例があります。ラーマです。ダシャラタの奥さんは子供ができなかったので、儀式をしてラーマをもうけました。そのころは聖者たちも彼らを手助けしていました。だが、賢い人たちはやがて気づき始めました。神様のおかげで、欲望は満足し喜びはあらわれるものの長続きしない。それだけではなく、しばらくすると別の苦しみがあらわれ出てくることに。

「どのように永遠の喜びを得るか」その方法をさがすため、聖者はたくさん調査しました、考えました。そしてその結論、それが**ギャーナ・カーンダ**です、それが**ヴェーダーンタ**、すなわち**ウパニシャッド**です。知識の部分は、儀式では得られない問いの答えを追及したものでした。

「ウパニシャッド」の内容　→　カルマ（儀式）を執りおこなってよろこびや楽しみはあらわれるものの、続かない、消えます、そのうえ苦しみや反動が出ます。それを、どのように安定した状態にするか？　彼らはたくさん考えて、ウパニシャッドという知識を得ました。

聖者たちは、「欲望がある間、永遠な楽しみは不可能」という結論を得ました。

そしてまた問いました、「世俗的な楽しみはどうしてつづかないのか？」それには「その楽しみの源は一時的だからである」という結論を得ました。楽しみの源も対象も一時的ですから、結果も一時的だと結論したのです。楽しみの源、たとえば、飲み物や食べ物、人間関係など、人とモノは喜びの源ですが、それらはみな、一時的です。あるときには存在し、あるときには存在しない。始まりがあり、終わりがある。聖者たちの命題は「永遠の至福」でした。そして「永遠の至福が欲しいのであれば、永遠のことを考えなければならない。源が永遠なら、結果も永遠であろう」それが結論でした。それでは、その「永遠」とは何ですか？　**ブラフマン**です。

「ブラフマン」について　→　フラフマンは永遠なる唯一のもの。無限なる唯一のもの。永遠なものと無限なものは一緒です。永遠だけが無限で、無限だけが永遠です。それをウパニシャッドでは「**ブラフマン**」と言い、「**絶対の真理**」と言っています。そして、**それ（ブラフマン）を悟れば、悟ったその人も永遠になります、なぜなら、悟りの対象ブラフマンが永遠ですから**、と言っています。論理的でしょう？

ウパニシャッドでは、さまざまな例や問答をつかって、ブラフマンを説明します。なぜなら、ふつうの人は誰も見てない、経験してない、わからないですから、ブラフマンのことを。わかりにくいですから、たくさんの説明が出ています。なぜなら、①ブラフマンのことを一度聞いてもはっきりわからない、②一度聞いても深く印象に残らない、このふたつの理由で、ウパニシャッドは何回もブラフマンについて説明しているのです。それだけではなく、別の条件、すなわち③心をきれいにする。そうしないとブラフマンについて理解できないからです。それは「世俗的なものから執着を切り離す」ということです。世俗的な楽しみを放棄しないと、ブラフマンは理解できないという意味です。どうして？

**「ブラフマン」と「放棄」について**　→　ウパニシャッドの言うことは、「永遠なもの、永遠の存在だけを考えてください」でした。ですから放棄をすすめています、永遠なものを考えるために一時的なもの（＝世俗的なもの）を放棄せよ、と。

ふつうの信者は理解していません。ふつうの信者の希望は、「世俗的な生活も続けます、神様のことも信じます」です。しかしそれは、「東に行くと同時に西にも行く」ことではないでしょうか？　東と西は反対方向なのに、それは可能でしょうか？　信者に選択権はあります、東に行くか、西に行くか。しかし同時に行くことは不可能です。ふつうの信者は、家族、娯楽、楽しみ、それらの何も消したくない、何も変化したくない。けれども神様も好き、神様も悟りたい。

無理です。なぜなら、世俗的なものは一時的で、神さまは永遠ですから。同時に、一時的と永遠という反対のものは実現できません。信者に選択権はある、一時的がよいならどうぞ世俗的、永遠がよいならブラフマン神様。当初は一緒にできたとしても、あとで、徐々に、反対であることがわかってきます。矛盾が出てきます。

「放棄」の意味はなんですか？　それは心をきれいするということです。心の中にある執着や欲望は、一時的なものにまつわるものです。永遠のものを本当に考えたいなら、一時的なものを放棄しないと不可能です。５０パーセントずつ？　いや、その信者は、世俗的なことも、神様のことも楽しめないでしょう。その信者は、神さまが好きですから世俗は１００パーセント楽しめない、けれども神様のことをずっと考えているわけでもないから、神様の楽しみも出てこない。真ん中の状態。矛盾がおこります。

**「放棄」のほんとうの意味**　→　やがて信者は選択をせまられます。しかしそれは家族を放棄するということではありません。**家族を持っていても、それが「神聖」にならないといけない**ということなのです。家族、仕事、生活のやり方、人間関係、**すべてを神聖化、スピリチュアライズすること、それが大事**です。ある部分は神聖だが、ほかの部分はそうでないという状態では、矛盾がたくさん起こります。ウパニシャッドは言っています、「ヴェーダーンタ、ウパニシャッドの勉強だけで、真の理解は得られない。心をきれいにしなければ、ブラフマンの反射は心にあらわれない」と。このような例があります。汚れた心の状態を「表面に波紋が広がった水」、「月」をブラフマンにたとえて、「月の反射を水に見たいなら、水の表面をきれいに（静かに）する」。すなわち、欲望やエゴや怒りで落ち着かない汚れた心を、静かに、きれいに、落ち着かせる。

悟りの方法と悟った結果　→　ウパニシャッドには、ブラフマンすなわち真理をどのように悟るか、また真理を悟った結果についても語られています。

ひとつの方法は「**識別**」。実在（永遠なもの）と非実在（一時的なもの）を常に識別する方法。いつも、何が一時的で何が永遠か？　自分についても、何が一時的で（たとえば、身体、心、感覚、知性などがそうである）、何が永遠か（＝魂）。宇宙的なレベルにおいても、何が一時的（＝名前と形）、何が永遠（＝ベースはブラフマン）か。

また、偉大（マクロ）なレベルでの「ブラフマン」たるものが、個人（ミクロ）のレベルでの「アートマン」「魂」です。それらはそもそも同じ本性、「純粋な意識」「サッチダーナンダ」です。そう考えると、真理を悟りたいなら、われわれ自分の本性を悟るとブラフマンを悟ることができます。これもひとつの方法です。

すると、どのような結果があらわれるか。永遠な至福があらわれます。そして恐怖がなくなります。死の恐怖も、です。私は純粋な意識で、身体ではないですから、身体が亡くなってもわたしはなくならないから。

みなさん考えてください、すべての恐怖、すべてのエゴや怒りの源は、身体でしょ？　からだ意識(＝自分と身体を同一している)でしょ？　だから、からだ意識がなくなれば、それらもなくなります。身体意識により、すべての否定的な感情が出ているのです。そうではなく、ウパニシャッドが言うように、「私は純粋な意識です」ということを識別して、「私はからだではない、アートマンです」と本当に信じ悟ると、死の恐怖はなくなります。何を燃やしますか？　何がなくなりますか？　身体が死にます、身体を燃やします。しかし、純粋な意識は、燃やすことも、なくすことも、殺すこともできないですね。死の恐怖がなくなり、すべての疑いがなくなると、無知がなくなり、本当の意味で賢くなります。それが結果。

それだけではなく、すべての人に私を見ます、私の中にすべてを見ます。なぜなら同じ魂がみなさんの中にありますから、同じ魂は偏在ですから。普遍的な愛、調和、でます。個人的に幸せになるだけではなく、ハーモニー（調和）ができます。なぜなら悟るとわかるから、私の魂はほかの人の中にもあることが。

今の我々の関係はなんですか？　「からだからだ関係」。我々は、からだとからだの関係ですから、その関係も消えます、なぜなら身体はなくなるものですから。からだが変わると人のつながりもなくなります、愛情もなくなります。しかし、もし、人の中の魂まで愛しますと、愛が魂まで入りますと、その種類の愛はなくなりません。いつも精妙です。ですが、ふつうの人の愛情は、身体と心どまり。そうではなく、**スピリチュアル・ラブ、霊的な愛**にしてください。そうすると、人間関係はとってもきれいになります。さっき言いましたね、自分の魂を他の人の中にみる。　Spiritual kind of love, Spiritual relationship.　（霊的な愛、霊的な人間関係）。　ね？　それは何の結果？　悟りの結果。悟るとそのような結果が出ます。おもしろい結果です。

**以上が、ヴェーダとウパニシャッドの説明です。ウパニシャッドの内容は、個人的アートマンとブラフマンがひとつになることです。川の水（アートマン）が、海の水（ブラフマン）とひとつになるように。そのように自分の存在がなくなって、海とひとつになる。それがウパニシャッドの最高の経験です。**

以上